

| | | | |
|----------|---|---------|-------------|
| 氏名（本籍） | イヅミ 泉 | タカ 貴 | コ 子（香川県） |
| 学位の種類 | 博士（音楽） | | |
| 学位記番号 | 博音第95号 | | |
| 学位授与年月日 | 平成19年3月26日 | | |
| 学位論文等題目 | 〈論文〉『G・Verdi《Luisa Miller》における調性の配置と音楽的表現との関係 | | |
| 論文等審査委員 | | | |
| （総合主査） | 東京芸術大学 | 教授 | （音楽学部） 林 康子 |
| （演奏審査主査） | 〃 | 〃 | （ 〃 ） 林 康子 |
| （演奏副査） | 〃 | 〃 | （ 〃 ） 永井和子 |
| （ 〃 ） | 〃 | 〃 | （ 〃 ） 片山千佳子 |
| （ 〃 ） | 〃 | 助教授 | （ 〃 ） 吉田浩之 |
| （論文審査主査） | 〃 | 教授 | （ 〃 ） 片山千佳子 |
| （論文副査） | 〃 | 〃 | （ 〃 ） 林 康子 |
| （ 〃 ） | 〃 | 〃 | （ 〃 ） 直野 資 |
| （ 〃 ） | 〃 | 〃 | （ 〃 ） 永井和子 |

（論文内容の要旨）

ジュゼッペ・ヴェルディ Giuseppe Verdi (1813~1901) はオペラ作品を32作品（改作、改訂版の作品を含む）作曲している。32作品¹を作曲していく過程では作曲技法の成熟、題材・テーマ選びの趣向の変化をみることができる。それは彼を取り巻く環境の変化や、時代背景の移り変わりによって左右されたことも理由のひとつであろう。とりわけ彼の作品を通して最初に大きな変化が見られるのは、前期の作品群が愛国的要素に傾倒していたのに比べ、中期に位置する作品は人間の内面を表出することに重きを置き始めたという点ではないだろうか。それはひとつの転機を迎えていたと多くの研究者たちが注目している点である。その転機に位置するのが中期の15作目の作品《ルイーザ・ミラー Luisa Miller》（1849年ナポリ初演）である。この作品では作風に大きな変化が表われ始め、後期の作品群にみられる技巧の先駆的な部分も表れ始めるのである。

その先駆的なひとつの部分として、本論文ではこの作品の調性の構築という概念の観点から、ある調性の配置と音楽的表現との関係について考察をすすめていく。

一般的にヴェルディの前期・中期オペラ作品と調的構築というものはあまり結び付けて注目されない。それはむしろ彼が調性に縛られず、意識しないで作曲したのではないかという意見や見解が多いからかもしれない。しかしそれに対する反論ともとれる説をペーター・カーン Peter Cahnは『ヴェルディにおける調性の構築について *Zur tonalen Architektur bei Verdi* ²』という論文の中でたてている。彼の論文の中に挙げられている例から、少なくともヴェルディが調性に対してなんらかの意識をもっていたことがうかがえ、私は大変興味深いものを感じ、カーンの論文を先行研究の論文として取り上げることにしました。

声楽の“演奏する”という立場から調性についていえることは、自分が歌唱している単旋律の下でどのような和音が響いているのか、また次にくる場面の展開や心理の変化とともにどのような和音、和声の響きがやってくるのか、あるいは歌い出しの前に響いている和音がどのようなものか、と感じることは重要である。例えば短調で始まったアリアが途中長調になって終わるケースはよく見られるが、たいていその短調から長調に転調するには歌っている人物における心理の変化を表していることが多い。そのような転調がもたらす意義は演奏家の役作りにおいても関係すべき点ではないだろうか。また個人差

は考えられるが、調性が崩壊していない時代の作品を初めて譜読みする際にも、やはりある程度の和声感を感じながら、その音楽の構成を理解していくものではないだろうか。

そういった点から、ヴェルディが効果的に調性の変化を組み立てているというカーンの論点に私は注目し、彼の論文を先行研究論文として取り上げて考察を進めていく。

主には《リゴレット Rigoletto》(1851年ヴェネツィア初演)においてヴェルディ自身が使った用語“tinta musicale 音楽の色調、色合い”の先駆的的技巧につながっていったのではないかと考えられる。《ルイーザ・ミラー》におけるes mollの位置について検証していく。前半の章ではヴェルディやその他の作曲家たちが、ある調性に意義またはイメージを与え、効果的に調性の変化を組み立てているかということに触れる。そして後半の章ではヴェルディが組み立てた調性の構築から生まれた“tinta musicale”がいかなるものであったか、またその用語を生み出すまでの過程として《ルイーザ・ミラー》を取り上げる。

註

1. ヴェルディのオペラ作品年表は本論文の37-38頁を参照

2. Peter Cahn 《MusikTheorie》17/1、2002年 25-40頁

2001年7月4日ハイデルベルク大学で行われたドイツ文学と音楽学のゼミ主催による学術的講演『ヴェルディの全芸術作品』の中で発表されたものに補筆、訂正されたもの